

2回にわたって、『天理教教典』の後篇において「信心」は「道の子の心がけ」として、「信仰」が「道の子の歩み」として、順序立てて説かれていることについて書いているが、天理教原典における用例については触れていない。「おふでさき」には、「信心」も「信仰」もまったく使われておらず、もっぱら「道」（みち）が多用されて説かれているのであるが、つとめの地歌として人々が心に覚え込んでいる「みかぐらうた」には「信心」が、6回用いられている。

そこで今回は、前回までに書いてきた『天理教教典』における「信心」や「信仰」の読みを踏まえて原典を理解するために、「みかぐらうた」「おさしづ」の用例を概観することにしたい。

「みかぐらうた」の「しんべ」

「みかぐらうた」には、「しんべ」という言葉が6カ所にみられ、おてふりでは合掌の動作で表されている。そのお歌を挙げると次のとおりである。

こゝまでしんべしたけれど
もとのかみとハしらなんだ（三下り目9）
いつまでしんべしたととも
やうきづくめであるほどに（五下り目5）
どうでもしんべするならば
かうをむすばやないかいな（五下り目10）
なんぼしんべしたととも
こゝろえちがひはならんぞへ（六下り目7）
やつぱりしんべせにやならん
こゝろえちがひはでなほしや（六下り目8）
こゝまでしんべしてからハ
ひとつのかうをもみにやならぬ（六下り目9）

こうして列挙すると、これら6つのお歌はいずれも、第五節の前半にあることが分かる。深谷忠政氏は、「かぐら・てをどり」の「てをどり」（「みかぐらうた」の第四、五節）について、「てをどりは、／元の理における発展の理を象徴して、即ち、親神の教に導かれて更生して行く人々のたどる成人の過程—天理教信者の成人の過程—を手振りに表して踊るものであります」（『天理教—全人類の最後に求めるもの』改訂新版、道友社、1992年、111頁）と述べている。「みかぐらうた」の第四、五節は、「教信者の成人の過程」が歌われているというのである。したがって、「信心」が第五節の前半にあらわれているということは、『天理教教典』の「後篇」において、まず「信心」が説かれる順序と符合すると理解することができる。深谷氏も「第五節も後になるにしたがって、御利益信心とも見えるものより、次第に本格的信仰のものへと移っていくように思われます」（『みかぐらうた講義』改訂新版、道友社、1980年、57頁）と、「信心」と「信仰」を使い分けており、その順序が記されている。ただし、この引用部分は「信心」の用例ではなく、第五節の主題について論じたもので、「御利益信心」が一下り目、二下り目に当てはまり、三下り目からは「本格的信仰」が鮮明になってくると論じている（前掲書、81頁）。

深谷氏は、「信心」の出てくる三下り目九つのお歌について、

「このお歌をお作り下さいました頃は、もうをびやだけの神様と
思っている人ばかりではなかったとは思いますが、ありきたり
の拝み祈禱の神ぐらいに思っていた人が多かったのでありま
しょう」（前掲書、97頁）と指摘している。つまり、そこでの「信
心」は、拝み祈禱の「御利益信心」が想定されている。

五下り目五つに関しては、前のお歌で、「心のよごれ」や「よ
く」について説かれ、後のお歌では、「むごいこゝろをうちわ
すれ やさしきこゝろになりてこい」とあり、心のあり方につ
いて強調して「信心」が説かれ、十ではそうした「信心」する
上に講を結ぶことが説かれる。

六下り目について、深谷氏は「五下り目がおたすけの章とい
うならば、六下り目は信心の章ということが出来ましょう。／
即ちこの下りは、或は勇み或ははずみ、或は疑い或はそれよう
とする変りやすい人間心を見定めて、或は教え或は論し、はつ
きりした信仰の効能を見せていただく、揺ぎなき心境にまでみ
ちびこうとされる、親神様の親心をお歌い下されてある」（前
掲書、150頁）と、「人間心」に対するお論しを中心であると
記している。

そして、「七下り目はにをいがけのお歌にはじまり、田地と
種まぎ」について（前掲書、151頁）、八下り目は「ふしんを
目標とするよふぼく結集の章」（前掲書、168頁）であり、「よ
ふぼくがいよいよふしんにとりかかるために、如何に丹精し如
何なる道をたどるかということが、九下り目以下のお歌」（前
掲書、183頁）であると言われている。

このように、「信心」はすべて第五節の前半に出てくるが、
それはおもに「信心」する者、すなわち「道の子の心がけ」に
ついての論しであり、後半には、にをいがけ、ふしん、あるいは
ひのきしんといった「よふぼく」の、いわゆる「道の子の歩み」
について説かれていると理解することが出来るだろう。

「おさしづ」の「信心・信仰」と「道」

「おさしづ」については、これから読み進めていくのであるが、
簡単に触れておきたい。『おさしづ索引』（第2巻、教義及史料
集成部、1985年）によれば、「おさしづ」には、「信心」とい
う言葉は42回みられ、年代は明治21～40年とほぼ「おさしづ」
の全体にわたっている。一方、「信仰」という言葉は、「信心信仰」
という形で、明治28年に一度出てくるのみである。

中山正善「天理教教義における言語的展開の諸形態」（『みち
のとも』昭和35年11月号）には、「明治十八、十九年（一八八五、
一八八六年）の頃から所謂おさしづとして、現実的な種々の心
構えを教示されることとなつた」（10頁）と、「心構え」とい
う言葉が使われているが、それと「道の子の心がけ」としての「信
心」という言葉が多用されていることとはつながっているよう
に思われる。

それに対して、『おさしづ索引』（第3巻）によれば、多少の
重複や脱落もあるかもしれないが、「おさしづ」には「道」と
いう言葉が7,698回みられる。これからは、この「現実的な種々
の心構えを教示」された「おさしづ」における「道」を取りあ
げて、読み進めたい。